

## ロンドン学派言語学の脈絡理論について

宮 井 捷 二

現在日本では、米国の言語学特に変形文法の影響を強く受けたと思われる論文や著書が数多く公けにされており、英国の言語学についての研究（その理論の紹介、批判、応用を含む）はあまり行われていないようである。もっともこれは日本で発表された言語学関係の文献のごくわずかな部分から判断したことである。しかし現在の英国の言語学理論には、日本でももっと研究されてしかるべきものもある。ここでとりあげるいわゆるロンドン学派言語学（the London school of linguistics）もその一つである。以下ロンドン学派の脈絡理論（contextual theory）について気づいた点を、J. R. Firth の理論を中心に、あげてみる。

そもそもロンドン学派とは、文化人類学者の Bronislaw Malinowski の影響を受けた言語学者 Firth の指導のもとにロンドン大学を中心に発達してきた言語学者のグループである<sup>(1)</sup>。Firth は英国における一般言語学を学問として確立した人である。Firth の三つの主な業績は、古代インドから近代西欧に至るまでの言語学の歴史に注目したこと、脈絡理論を言語形式および言語機能の分析に応用したこと、そして prosodic phonology である。

(Bazell *et al.*, 1966 : Preface)。Firth の脈絡理論はもともと Malinowski の概念に端を発したものであることはよく知られている。しかし Firth 自身 (Palmer, 1968 : 94) および Robins (1964 : 41-2) が言っていることから分るように、Malinowski と Firth とは context of situation の概念を同じ意味で使用したわけではない。Malinowski は、いわば脈絡理論を文化人類学的分析に応用しようとしたのに対し、Firth は言語理論を形成しようとしてこの概念を用いた。Malinowski の脈絡は実際的で、発話が生じる環境についての実際の文化的物理的特徴 (features) から成り立っている。そしてこれでは、各発話を個々別々に扱わねばならなくなり一般論は妨げられるということで particularism と批判された (Carroll, 1953 : 239)。これに対し Firth の context of situation はもっと抽象的である。

Malinowski が context of situation という用語をはじめて使ったのは、Supplement to Ogden's and Richards's *The Meaning of Meaning* においてであり (cf. Malinowski, 1966 : Introduction, p. xi), 二語をくみあわせた理由について、context の概念は拡張せねばならないと同時に、語 (words) がつかわれる situation は言語表現に無関係なものとして見ずごすことは決してできないと言及している (Malinowski, 1923)。そして、言語の研究はそれを話す人々の文化および環境の研究と一緒に行わねばならない。すなわち cultural context を考慮する重要性を強調した。(しかし、これは、Malinowski は文化全体の分析を試みたのだから当然と言える。) Malinowski にとって、context は語の前後の言語的脈絡のみならず、発話の非言語的特徴、たとえば本来の言語以外の音、その他発話と直接関係のある非言語的動作、表情とか身振りなどをも意味する。また situation というのは、感覚的脈絡 (perceptual context) すなわち言語事象の非言語的総体 (物理的状況、

言語活動参加者の行動およびその他関係ある観察可能な現象) および Malinowski の言う context of culture をも含む (cf. Malinowski, 1966 : Introduction, p. xi)。

そもそも言語の脈絡という考え方は経験からの抽象であることは言うまでもない。現実には、言語事象がそれに関係ある諸々の要素の総体の中に起るのである。その意味では、Malinowski の脈絡は現実そのものに近いと言える、すなわち抽象度が低い。これに対し Firth の脈絡は Malinowski のそれより抽象度は高いが、この二人の言語学理論は現在の言語学理論にくらべたらずっと抽象度が低い。変形文法などは、Malinowski の立場からすれば、環境から切り離した死んだ言語を扱うあまりにも抽象的な理論ということになるであろう。現在の英国言語学界にも変形文法 (すなわち competence-dominated linguistics) に対する同様な批判があることは、*Journal of Linguistics* に掲載されるいくつかの論文をみても分ることである<sup>(2)</sup>。一方、変形文法家はロンドン学派言語学の脈絡は exhaustively に describe できないから全然 describe すべきではないとしているが<sup>(3)</sup>、これに対しては、およそ科学において exhaustiveness は無理であるという反論もある (Gregory, 1967 : 179)。だいたい変形文法家側には、situation などの用語に対する誤解がある。situation の概念をひろげて、いわば森羅万象にまで至らせることは不適當である。言語学的観点からすれば、常に言語現象との関係において situation をとらえるべきである。

抽象度が高くなると取り残されるものが生じてくることは当然であるが、言語をより精確にとらえようとして次々と新しい理論が生れてくるのもまたさけ難いことである。いずれにしても、言語学の研究において脈絡を無視しては言語の本質へ迫れないことは明らかとなるであろう。現在の変形文法は脈絡をあまり考慮していないが、もともと変形 (操作) の背後には脈絡 (のよなもの) が考えられているはずである。変形文法が意味の問題を扱うようになり、さらに discourse や presupposition を考慮するようになると、脈絡の問題に関心をもつようにならざるを得ないはずである。そうなればロンドン学派と変形文法とはより多くの共通の場を見出し、互いに補う合うようになるであろう<sup>(4)</sup>。この点に関する英国の最近の論文としては、たとえば Halliday (1967 & 1968) は重要であるが、Dakin (1970) も注目し価値する。彼はある事象が起ったことを描写した文 ('John stopped.') とその起った理由を「説明」する文 (たとえば 'John's brakes jammed.') との関係について述べている。

Firth は脈絡の概念を言語学のあらゆる分析のレベルにとり入れようとした。たとえば、

"Malinowski and Gardiner both make great use of the situation theory, and I, too, have developed its application in descriptive linguistics, though in a more abstract and general form as one of several levels in linguistic analysis, all of which should be congruent." (Palmer, 1966 : 147)

と述べている。しかし、よく指摘されるように、その言語学的応用が明瞭に示されていない。Firth 自らがその具体例と言っているものをみると、たとえば Firth (1957 : 18) では、'the sort of purely formal and contextual technique' が Straumann (1935) に表わされていることと、headlines や block language のような現象は普通の言語活動とはちがうことを指摘している。この contextual technique では観察可能な脈絡 (observable context) の条件の相互関係が重要だと言っている。また、phonetic, lexical, morphological, syntactical および semantic の各レベルで **b** **ə** : **d** という sound-group



か、教会での言語とか、仕事場の言語とかの違い（すなわち register）を考慮することはもう一つの高次のレベルではないか。やはりまず、言語の norm を研究の対象とすべきである。そしてその場合は、personalities は考える必要はない。言いかえれば、すべての register に共通な context of situation をまず考えるべきである。

言語現象のどの要因がより重要であるかは、分析のレベルによって異なる。たとえば当面の分析は文法のレベルで行うとして、どの要因を考慮すべきであるかについては、前号の紀要で提案した。さらに、文法概念をどう規定するかによって、分析の基準が異なる。

たとえば、文法と意味の関係もいろいろ微妙な問題がある。Firth の場合、言語学のあらゆるレベルで意味を研究すべきなのである (cf. “a strictly formal study of meaning at all levels” (Palmer, 1968 : 160) あるいは “linguistics without ‘meaning’ is sterile” (ibid.))。ここで Firth が言う「意味」の意味が問題である。Firth の ‘meaning’ はだいたい function in context に等しいとされているが (cf. Bazell *et al.*, 1966 : Preface), Firth がこの点をもう少し綿密に説明していたなら彼の理論の支持者も多かったかもしれない。いずれにしても、彼の意味というのは、一般の (symbol-referent 関係の) 意味とは異なる。いわば言語的単位の間関係のようなものを意味と言っている。そして Firth にとっては言語学の目的は、社会における言語の機能を考察することである。このことに関して Firth は正しい。Robins (1964) は Firth の context of situation を semantics の項で扱っているが、Robins も context of situation は semantics のレベルだけのものと考えているのだろうか。

Firth のような考え方は必然的に、言語学者は一番小さい言語的単位からはじめてだんだん大きい単位へと移っていくべきであるという構造言語学的な考え方に対して否定的となり、扱うべき単位をより大きいものにするべきだと主張することになる (cf. Salmon, 1963)。そして Firth が激しく攻撃したと言われる (Palmer, 1968 : Introduction, p. 5) Harris なども同じような主張（すなわち談話分析）をしたが (Harris, 1952), それは Firth の方法とは全く異なったものでまた一般の注目をそれほど受けたとは思えない。しかし Chomsky の変形理論もいわば Harris の談話分析に端を発したものであることなどを考えると、言語の本質的な問題はやはり文より大きい言語的単位の扱い方にあるようだ。

さて、筆者は「J. ジョイスの *Dubliners* におけるいわゆる Fragmentary Sentence について」(言語学的考察)(ホレーシオへの別辞—詩人安藤一郎教授記念論文集, 1971 : 224-43) において *Dubliners* からの data のみに基づいて fragmentary sentence の分類を提案した。しかしその原稿を書いたからすでに一年以上も経つので、上記の小論文でも記したように、以下その分類について若干の修正を加えたい。いつも fragmentary sentence ばかりを問題にしていると思われるかもしれないが、このような不完全な形の文をどう扱うかが従来および現在の言語学の大きな課題であるばかりでなく、このようなタイプの文の研究をしてこそ言語の本質に迫れると考えるからである。

以上述べてきた脈絡理論の妥当性 (adequacy) を示す evidence の一つは、たとえば、英語という言語には主語＋述語形式の文の他に fragmentary sentence が存在することである。脈絡理論は、主語＋述語形式の文を説明しようとする場合にはそれほど powerful とは思えないかもしれないが、fragmentary sentence の説明には有効であることが分る。fragmentary sentence の分類の基準としては、addresser, addressee, message, context

および form という言語成立の基本的要因をまず考慮する。そしてそれらの要因のうち、どれが優勢な機能を果たすかが分類の基準となる。その他, degrees of dependence upon context, addresser-addressee context, yes-no question, wh-question, answer, response, repetition, restatement, addition, non-verbal context (=situation) などがあるが、これらについては今まで発表した論文で説明したのでここではくり返さない。

*Dubliners* には約 350 の fragmentary sentence が含まれ、各分類項目の後に示した数字はそこに分類されるべき fragmentary sentence の数を示す。これは Firth がその重要性を強調する 'restricted language' の context の分類である (Palmer, 1968:17)。なお、例文はごく一部を選んだ。

### The Tentative Classification of Fragmentary Sentences in *Dubliners*.

#### I. Dependent Fragmentary Sentences

##### (1) Questions confirmatory, supplementary, etc.

###### (a) Repetition or restatement type: 12

'All I want is to have a look at her. I'm not going to eat her.'

'O a look at her?' said Corley, more amiably'. (*Two Gallants*)

'I have a crow to pluck with you.'

'With me?' (*The Dead*)

'We have one child,' he said.

'Son or daughter?' (*A Little Cloud*)

###### (b) Wh-? type: 21

'Well, so your old friend is gone, you'll be sorry to hear.'

'Who?' said I. (*The Sisters*)

'It isn't but he has it, anyway. Not like the other tinker.'

'What other tinker,' said Mr. Hynes.

(*Ivy Day in the Committee Room*)

###### (c) Well? type: 3

##### (2) Additions to preceding sentences

###### (a) Closely connected with preceding sentences: 16

'Crofton and I were in the back of the...pit, you know the-'

'The body,' said Mr Cunningham. (*Grace*)

'That's forfeit,' said Mahony. 'And so much the better for us—a bob and a tanner instead of a bob.'

(*An Encounter*)

'The fact is,' said Gabriel, 'I have just arranged to—'  
 'Go where?' asked Miss Ivors. (*The Dead*)

(b) Less closely connected with preceding sentences : 11

'I can see him so plainly,' she said, after a moment.

'Such eyes as he had : big, dark eyes ! And such an expression in  
 them—an expression !' (*The Dead*)

(3) Answers, responses, etc.

(a) Answers to yes-no questions

(i) Answers containing *yes* : 16

(ii) Answers containing *no* : 6

(iii) Answers containing *not* : 4

(iv) Answers containing adverbials : 4

'Would you like a drink, boy?'

'If you please, sir,' said the boy.

(*Ivy Day in the Committee Room*)

(b) Answers to wh-questions

(i) Answers to *who*-questions : 7

'Who?' said I.

'Father Flynn.' (*The Sisters*)

(ii) Answers to *what*-questions : 11

'What's he doing?'

'Nothing,' said Little Chandler. (*A Little Cloud*)

(iii) Answers to *when*-questions : 2

(iv) Answers to *where*-questions : 2

(v) Answers to *how*-questions : 1

(vi) Answers to *which*-questions : 1

(c) Responses to requests, commands, statements, etc.

(i) Responses containing *yes* : 12

(ii) Responses containing *no* : 15

(iii) Other stereotyped responses like *all right, right, not at all, of course,*  
*etc.* : 20

(d) Repetition or restatement types of answers or responses : 8

'Did he... peacefully?' she asked.

'Oh, quite peacefully, ma'am,' said Eliza. (*The Sisters*)

(4) Situational : 21

The cabin door opened and he saw the Hungarian standing in a shaft of  
 grey light : 'Daybreak, gentlemen!' (*After the Race*)

'This page or this page? This page? Now, Dillon, up.'

(*An Encounter*)

## II. Independent Fragmentary Sentences

### (1) Interjection + !: 18

Someone opened the door of the room and called out :

'Hello! Is this a Freemason's meeting?'

(*Ivy Day in the Committee Room*)

### (2) Interjection + Nom (Vocative) + !: 6

'Hello, Crofton!' said Mr Henchy to the fat man.

(*Ivy Day in the Committee Room*)

### (3) Independent FS containing Nom as head :

#### (a) Nom + !: 22

When I reached the top of the slope I turned round and, without looking at him, called loudly across the field :

'Murphy!'

(*An Encounter*)

Cards! cards! The table was cleared. Villona returned quietly to his piano and played voluntaries for them. The other men played game after game, flinging themselves boldly into the adventure. (*After the Race*)

#### (b) (Determiner) + Adj + Nom : 33

Poor Aunt Julia!

(*The Dead*)

I crammed my mouth with stirabout for fear I might give utterance to my anger. Tiresome old red-nosed imbecile! (*The Sisters*)

#### (c) Nom + Adj : 6

Talk of immorality!

(*A Little Cloud*)

#### (d) Adv + Nom : 4

Nearly the half-hour! She stood up and surveyed herself in the pier-glass.

(*The Boarding House*)

#### (e) Mixed type : 3

'It pulls you down,' he said, 'Press life. Always hurry and scurry, looking for copy and sometimes not finding it : and then, always to have something new in your stuff. Damn proofs and printers, I say, for a few days.'

(*A Little Cloud*)

## (4) Nom (as subject) + Verbal, Adj, etc. : 9

Cab windows rattling all the way, and the east wind blowing in after we passed Merrion. (The Dead)

All his long years of service gone for nothing!

All his industry and diligence thrown away! (The Boarding House)

## (5) What a (n) + Nom + ! : 6

What merriment! (After the Race)

What an end! (A Painful Case)

## (6) Formula : 33

'Good evening, Freddy,' said Aunt Julia. (The Dead)

'Fine night, sir!' (After the Race)

## (7) Other types including interrupted speech or aposiopesis, etc. : 13

'I was just telling my mother,' he said, 'I never heard you sing so well, never. No, I never heard your voice so good as it is tonight. Now! Would you believe that now?' (The Dead)

'...He had a beautiful death, God be praised.'

'And everything...?' (The Sisters)

Mr Power waved his hand.

'Those other two fellows I was with—'

'Who were you with?' asked Mr Cunningham.

'A chap. I don't know his name. Damn it now, what's his name? Little chap with sandy hair...' (Grace)

(昭和46年11月30日)

[この小論は、日本英文学会中部支部第24回大会(昭和46年11月7日、信州大学)において口頭発表したものを大幅加筆修正したものである。] [なお、この研究は昭和46年度科学研究補助金によるものである。]

## 註

- (1) "He (=Firth) was until his retirement in 1956 the Professor of General Linguistics and the Head of the Department of Phonetics and Linguistics at the School of Oriental and African Studies in the University of London." (Palmer, 1968 : Introduction. p.1).
- (2) たとえば, "Any model of linguistic competence which takes a de-situationalized view of language activity is that much impoverished. Competence-dominated linguistics faces the danger of sidling into psychology ; performance-dominated linguistics of drifting into sociology." (Gregory, 1967 : 197).
- (3) Gregory (1967 : 179)によれば, これは Katz & Fodor (1964 : 24) によって代表される意見らしいが, 同様な批判は Langendoen (1968) や Chomsky (1965 : 195) などにもみられる。
- (4) Firth と変形文法との関係については, Palmer (1968 : 9) 参照。

## REFERENCES

- Bazell, C. E., Catford, J. C., Halliday, M. A. K. & Robins, R. H. (1966). *In Memory of J. R. Firth*. London.
- Bowman, E. (1966). *The Minor and Fragmentary Sentences of a Corpus of Spoken English*. Indiana.
- Carroll, J. B. (1953). *The Study of Language*. Cambridge, Mass.
- Enkvist, N. E., Spencer, J. & Gregory, M. J. (1964). *Linguistics and Style*. London.
- Chomsky, N. (1965). *Aspects of the Theory of Syntax*. Mass.
- Dakin, J. (1970). Explanations. *Journal of Linguistics*. 6. 199-214.
- Firth, J. R. (1957). *Papers in Linguistics 1934-51*. London.
- Gregory, M. (1967). Aspects of varieties differentiation. *Journal of Linguistics*. 3. 177-98.
- Halliday, M. A. K. (1967 & 1968). Notes on transitivity and theme in English. Parts 1-3. *Journal of Linguistics*. 3 & 4.
- Harris, Z. S. (1961). Discourse analysis. *Language*. 28. 1-30.
- Jakobson, R. (1971). 「言語と文学-詩学的解析」(川本茂雄訳). 講談社 現代世界百科大辞典. Vol. I. 東京.
- Katz, J. J. & Fodor, J. A. (1964). A reply to Dixon's 'A trend in semantics.' *Linguistics*. 3. 19-29.
- Langendoen, D. T. (1968). *The London School of Linguistics*. Cambridge, Mass.
- Malinowski, B. (1923). The problem of meaning in primitive languages. Supplement to Ogden, C. K. & Richards, I. A. (10 th. ed. 1966). *The Meaning of Meaning*.
- Malinowski, B. (1966). *Coral Gardens and their Magic*. Vol. II. *The Language of Magic and Gardening*. second ed. London.
- Palmer, F. R. (1968). *Selected Papers of J. R. Firth. 1952-59*. London.
- Robins, R. H. (1964). *General Linguistics : An Introductory Survey*. London.
- Salmon, V. (1963). Sentence types in modern English. *Anglia*. 81. 23-56.
- Straumann, H. (1939). *Newspaper Headlines*. London.

**Summary**  
**of**  
**Some Notes on the Contextual Theory Developed by**  
**the London School of Linguistics**

Shoji MIYAI

In the field of linguistics in Japan, more attention should be paid to the London School of Linguistics, particularly its contextual theory, which was initiated by Bronislaw Malinowski and developed by J. R. Firth. Malinowski applied the conception of the context of situation in his anthropological analysis, while Firth used it for the formulation of linguistic theory. Malinowski's context of situation, which is in more concrete form than Firth's, implies not only the verbal context of the utterance, but also the matrix of non-linguistic relevant features including even the 'context of culture.'

Firth's idea of context is more abstract. His proposed interior relations of context are as follows :

1. The participants : persons, personalities and relevant features of these.
  - (a) The verbal action of the participants.
  - (b) The non-verbal action of the participants.
2. The relevant objects and non-verbal and non-personal events.

This proposal has some points which could be improved. Firstly, the participants (addresser or addressee) should not be included in context. Secondly, personalities as explained in Firth (1957), should not be taken into account at some levels of linguistic analysis, at least in grammar. From Firth's point of view, linguistics at all levels of analysis is concerned with 'meaning', or function in context, which is the center of his analysis both of linguistic form and of linguistic function.

Any meaningful linguistic analysis would be impossible without taking into account the context, in addition to other fundamental factors of language — addresser, addressee, message and form. The language-event should be held to consist of the functions of all these factors. The transformational grammarians' criticism that because context or situation could not be described exhaustively, it should not be described at all, comes from their misunderstanding of the terms. Context is an abstraction from (human) experience and is not the same as realities. The British linguists' countercriticism is that competence-dominated linguistics, which takes a de-situationalized view of language, is not fruitful.

Context should be classified on the basis of some linguistic formal criteria, as

shown in this paper. Moreover, something like context must also underlie the concept of transformation. This will become more probable if we consider that Noam Chomsky's transformational grammar was originated from Z. S. Harris's discourse analysis and that transformationalists have been recently concerned with problems of semantics, presupposition and discourse. One of the most important areas of both present-day and traditional linguistics has been the treatment of linguistic units larger than sentences. Therefore, transformational grammar and the London School of Linguistics should and could be complementary to each other.

The adequacy of the contextual theory is clarified in its application in the linguistic analysis of English fragmentary sentences on the basis of data obtained from James Joyce's *Dubliners*. The tentative classification of fragmentary sentences in *Dubliners* is shown with relevant examples.